第25回大会によせて（感想）

長崎　威之
（江戸遺跡研究会会員）

「江戸在地系カワラケの成立」という大会表題と、梶原氏（以下各氏敬称省略）の「カワラケを題材に権力者側に光をあてる」という趣旨と、いささか異なるような気がしないでもないが、内容は趣旨に沿ったものである。紙上発表を含めた発表者は江戸の範囲を超え西から拠点順に挙げれば、大阪城、有岡城、京都、南伊勢、名古屋城、西尾城、駿府城から関東圏内の小田原城、北武蔵、西上野、下総、常総のエリアに亘った。更に、それぞれ関連エリアへの言及があり頭は嬉しい悲鳴を上げた。画期的だったのは、これら参加者が関連資料として選りすぐった各地のカワラケの実物展示があったことである。私のように従来　考古学とは全く無縁の者にとっては、遺跡研で僅かながら知った「たかがカワラケ、されどカワラケ」の意味を目の当たりに触って実感できたことはまことに得がたい経験だった。貴重な資料を遠路お持ちいただいた方々にあらためて感謝をしたい。

大会趣旨を梶原の別の言葉で表現すれば「考古資料から権力の問題にも、発想・視点・資料操作が整えば言及できる」となる。そこから要求された内容は、①分類と系譜を明らかにする　②編年の明示　③出土地点の性格の明示　という過酷なものである。それに、「中世・近世の変わり目の考察」、「江戸のカワラケはどこからきたのか」、「ロクロ成形の回転方向の視点」も報告者に求めたようである。これら課題は高い業績を挙げている報告者各位をもってしても少なからず悩ませた節を感じる。にも拘わらず誠意をもって資料抽出・再整理を試みられたことは、各報告から受け止めることができた。

では、前述の視点、問題提起に沿って何か大きなものを確立したかといえば、そうではないと言わざるを得ないだろう。課題毎に概観してみる。

1　権力とカワラケの推移

カワラケの消長に徳川幕府儀礼の成立過程を重ねてみる梶原の命題を仮に「カワラケの消長権力意志説（以下権力意志説）」と名付けると、武蔵北部で山内・扇谷両上杉の拮抗を山内の左回転カワラケと扇谷の右回転カワラケの出土分布に見、北条氏の進出、古河公方の関与による出土変化を評価する北武蔵の田中を除き、一様に否定または、懐疑的であった。

こうした結果は、ある程度予想出来た。そもそも、「権力」が関与する範囲は当該地域において全域・全般的である。一方、カワラケも武家儀礼に限定される存在ではない。最低考えてもカワラケと武家権力との間には、儀礼面と、武家の日常雑器としての生活面や商品としての領国殖産面で接点想定ができる。それに対し権力意志説は、例示的でしかないが武家儀礼に使われるカワラケを想定していると言える。しかしその前提となる出土状況は、武家儀礼に使われるカワラケの器形・胎土・製法などで特定に至らず、大量廃棄で判断するのみである。やむなく、武家地の出土に限定して資料分析する方法をとった苦衷の表が、梶原分類

表と言える。この一事をとっても権力意志説の検証の困難を知るからである。

権力関与について討論の場で、否定見解が明確だった地区の状況になにか示唆するものがあるだろうか。京都の能柴によれば、京都は、大きなカワラケ生産拠点を持ち、圧倒的な量のカワラケが出土する。公家のカワラケ偏重・天皇から門跡寺院への精製カワラケ大皿の下賜など京都ならの話に興味がわく。出土相と変遷に公家・民地・武家屋敷などで特に相違が見られないというのが否定論拠と判断した。南伊勢の伊藤は、南伊勢では土鍋以外、皿等も多量に作っている。器形から土鍋は各地でそれと認識されているが、南伊勢の皿と思える物が江戸にも出土している。それから商品流通が広範囲に活発に行われていたことを強調し、南伊勢の土器変遷に権力の介入は見られないという趣旨であった。

ある意味痛烈な否定は、常総の宇留野の見解である。真壁氏支配下の塙世村でのカワラケ生産が、真壁氏の衰退後、むしろ活況を呈してきたのは、権力と関係ない証左という。これは、江戸時代文献を駆使し中世のカワラケ生産を推定した上での意見である。提示の文献資料はカワラケ生産地の状況を示し、文献利用の典型のような良い物である。私個人としては、古代からの大掾氏有力支族で戦国末急激に戦国小名化をとげ、秀吉の東国入りを機に佐竹氏の配下に取り込まれ消滅した真壁氏の真壁城に近い砦城の塙世で土器生産が継続的に行われていただろうことは、容易に肯定できる。宇留野は推定の補強のため、武蔵・上野の古代官道沿いの土器生産地をあげ雄弁に論じている。あとは出土で証明される事をひとえに願うばかりだ。

その他の論者は、土器相の変遷と権力側の画期と重ならないなど権力意志の作用を断定するには困難な状況で、とりあえず否定、研究整理の段階で意見保留、基本的に納得しがたいというニュアンスまで含まれると推定する。

２　中世から近世の変化

各地区の中世から近世の変化にドラスチックな様相変化はなかったというのが各論者の結論と受け取った。カワラケの変化は、江戸幕府開幕と特別連動するところはないということであろう。その中で、小田原城については、北条氏敗退後、家康関東入りに伴う大久保氏入城から大久保氏改易までの約１０年が空白の１０年となっていたという従来からの問題があった。今回を機に担当の北條が、資料見直しをはかり、大久保期の資料を抽出したことは、今大会の成果と言うべきだろう。出土物激減の時代であるという。小田原を特別知るというわけでないので戯言に過ぎないが、忠隣改易の際の小田原城破壊の状況は、それほど明らかになっていないように思うがどうだろうか。

そうであればその影響、漁師や有力寺院が小田原から江戸に移転させられたように土器職人の移転があったのではないか等を視野に入れて検討していただけたらと思った。北条報告は、小田原城だけと範囲こそ狭かったが、今回のテーマ投げかけに、真っ向から対応した一番の報告と見えた。

３　江戸在地カワラケのルーツ

下総の葛西城との関連以外、他地域からは、影響について積極的意見はなかった。ほぼ従来通りと言える。逆に１８世紀になると江戸からの影響と見てよいという指摘を多くの地域から受けたのは、マクロに見た今回の交流の成果のように感じた。

４　ロクロ回転の相違

北武蔵での左右分布や変化は、事実上無政府化しつつあった関東において、領主圏の実態を反映する好資料だと素直に了承できる。しかし、左が上位という論はいかがだろう。北条氏内での上下を傍証に挙げたが、古河公方が右ということをどう説明するのか。右・左を規制するものがなければ、回転の相違は所詮、製法の相違、製作集団の相違を示すに止まる。だが回転の提起が、改めて考古資料の見直しを促した意義は深いと思う。また反語になるが、にも拘わらず、この提起でなにがあぶり出せると考えたのか、私には皆目分からなかったのは事実。

ここに関連づけて言うと、カワラケ感に地域性があることを知った。東海地方（美濃・伊勢・三河・遠江・駿河）では、供膳具が指標になっている。関東では、そうした視点で語られないようであるが、どうなのであろうか。東海地方では、時期によって隣接地域毎に回転方向の様相が違う。三河の 15 世紀～ 17 世紀には、東西で左・右と異なり、西は山向こうの瀬戸の影響、東は渥美半島から伊勢へのルートを指摘する見解（名古屋の佐藤）や、東三河圏は遠州の湖西まで及ぶ（西尾の鈴木正）など複雑で面白い話が聞けた。

京都カワラケの普及圏に関心があったが、近隣といってよい大阪城の渡邉、有岡城の赤松からの報告では、粗雑な模倣らしい物が初期に見られるが、あとは、全く独自に展開しているという趣旨と理解したが、これには少なからず驚いた。

○　権力意志説への一区切り

土器生産拠点が明確で、流通が活発な地区は、権力意志を否定する。京都では、公家の圧倒的支持（？）によって近世末まで伝統的なカワラケが使われ続けたが、１８世紀に入ると町屋ではカワラケ出土が激減し、出土物は赤色ロクロ成形の物に変わるという。近代以前の天皇は権力の根源である。公家は天皇の藩屏という視点からすれば、カワラケの不変化は、権力意志と無関係とは言えない。

常総で、鹿行地区と他地区の涸沼で似た物が出ることに水運のつながりを見るという視点もあるが、常総の土器相の区分自体が領主圏と重なるように見えることは、カワラケ生産・流通に権力が及ぶことを示すだろう。また、古河公方のカワラケ面での影響の高い評価（？）などは、権力意志説と言ってよいだろう。

北武蔵・下総・常総などから小田原北条氏の勢力拡大にともない、拠点から北条系カワラケの出土が見られるという事実も、カワラケが権力動勢と無縁でないことを示すだろう。下総の永越が、北条系カワラケでも手づくねカワラケを少量出土する葛西城とロクロカワラケしか出土しない本佐倉城という二タイプの指摘、葛西城の用途の変化に伴い手づくねカワラケが姿を消すこと。そこに権力の意志を感じさせる。

駿府城について河合は、今川氏親時代頃と見られる一括廃棄の出土物に白色手づくねカワラケが少量出ること、この時代は、姻戚の京都公卿の滞在する時期であると指摘する。

こうした状況で何故、権力意志説に賛同が少ないか不思議な思いがする。

検証の方法論を考えてみよう。武家の日常使いのカワラケの入手は、領地とそこにカワラケ生産地を持っていれば、領地から運ぶか、江戸または江戸近在から購入することになるだろう。この江戸または江戸近在から購入したカワラケと、庶民のカワラケと全く様相を異にするものだろうか。武家と庶民との間には、階層差別的相違（精製度・胎土など）が連続的あるいは不連続的に存在することは十分予想されるが、産地・生産・流通含めた相関・相違を明確にし、その上で、日常使い品と武家儀礼のカワラケ（以下、式正品と呼

ぶ）との相関・相違を見ていくのが基本だろう。そして、生産規制の存在か、式正品の変遷が他に影響を及ぼすことを検証して、はじめて権力意志を主張できるだろう。検証過程は逆もまた可能である。ところが、梶原分類は、武家の日常使いカワラケ相と庶民のカワラケ相の相違を示さない。どうなんだ？となる。この私の個人的心配は、分類表の母集団を知っている者には、特段問題になることではないだろう。長佐古が討論の場で指摘した出土の偏在があるという事実が、カワラケ出土は武家地に多く民地にまれだという偏在を意味するなら、梶原分類が武家地限定でそもそも問題がないことになる。これらに知見のない者は、これ以上立ち入る余地はない。

視点を変えてみる。討論の際、永越が権力意志は小田原北条氏に見られるという趣旨の発言をした。その通りであろう。北条氏が本城の小田原と支城との間に特定のカワラケを傾斜配分する体制には、式正品の特定・数量統制・儀礼執行権の分与等の統制手段があって制度が意味を持つ。それには当然にカワラケの製造制限をともなうだろう。

翻って、徳川幕府にそのようなことがうかがえるであろうか。駿府城が城代制に移行したことは、徳川幕府の官僚支配に移行したことになる。徳川分家の城でさえなくなったとマイナー評価でなく、江戸に準ずる意識がはるかに強くなったと考えるが、中泉御殿（1670 年廃絶）など周辺域も含めた判断は、在地カワラケの受容だという。徳川氏の故地でもあり、譜代が埋める三河でも江戸との関係はないという。大阪城代下の大阪でも同様であることは、幕府に統制の意志がない証左のようにも見える。

「鍋島」で吉宗が色絵を規制したとか、家治は器形に好みがあったなど、献上側に権力意志を示す記録が漏れ出ればヤッターとなる。偶然を期待しなくとも、式正品を特定できればよいが、出土品からの断定は難しいようだ。

となれば、梶原命題の成立には、①江戸城から梶原分類に即したカワラケ出土状況が他に先行して見られる　②例年幕府献上のカワラケ（用途特定がまず先だが）の変遷が他の先鞭となる　③幕府の出納資料などから消長を証明できる　④幕府の礼典記録などから仕様変更などを読み取れる　⑤御土器大工松井某の窯あるいは帳簿などから消長に符合する資料を検出した場合のどれか一つ以上該当する必要があるだろう。それ以外、カワラケの消長を、好みの反映、生産技術・生産体制など他の原因でないと断定するのは科学的でない。そして、どれ一つとっても立証が困難を極めそうな予感がする。だからこそ、梶原は広く命題を投げかけているともいえる。

私は本大会をもって、梶原命題に一区切り付けるが、問題は本質的に解決したわけではない。カワラケ献上の話が今回初めて出た。誰が、どのような用途のために、どういう仕様のカワラケを献上したのか？。根拠資料を見てない（見られない）者には、どの程度解明されているのかブラックボックスだ。何れにしろ関連分野の裾野も広がっている。梶原分類も出土品の増加にともない拡張していくだろう。こうした展望のもと、発掘しただ層序を整理するのでなく、常に鋭い問題意識をもって、出土物のもたらす情報をくみ尽くして欲しい。科学的姿勢を忘れず出した結論なら、間違いを恐れず、勇気をもって発言して欲しい。堂々と論争すればよい。なにもしないより、一層高みの正しい答えに到達すると思う。

皆様の健闘を外野より見守りたい。

戦国期～江戸前期のカワラケ雑感

－江戸遺跡研究会第 25 回大会「江戸在地系カワラケの成立」から－

梶原　　勝

（江戸遺跡研究会世話人・文化財コム）

はじめに

江戸遺跡研究会第 25 回大会「江戸在地系カワラケの成立」は、大会準備の段階から大会当日、そして終了後も様々なことを考えさせられた。それは議論のたびに出てくる問題点、そして大会当日の発表にみる大きな成果によるものである。

ここでは大会主催者の一人として、その責を果たすために総括を行うべきであるが、先にも記したようにあまりにも問題点が多く、とても筆者の能力では適わない。そこで大会の感想ということでお許し願い、以下、思いつくままに大会を振り返り、いくつかの問題点について述べてみたい。したがって論文といった類のものではなく、あくまでも雑感である。

(1) 変遷の画期と権力との関係

カワラケの変遷とその画期及び権力との関係を、永越信吾氏による葛西城におけるカワラケの分類（発表要旨 42 頁～ 43 頁）を基にみてみたい。

永越氏の発表「下総と江戸東郊のかわらけ」は、葛西城及びその周辺のカワラケと下総の主な城館のカワラケについて述べたものである。その中で葛西城のカワラケについて、これまでの長瀬分類（長瀬 1974）を改変し、新たに永越分類を創設した。これによって葛西城のカワラケがより理解しやすくなったが、一方で隣接地域を発表しつつ長瀬分類を用いる宇留野主税氏の発表との間でわかりにくい部分も生じてしまった。

その永越分類だが、15 世紀第 4 四半期に出現したとされるⅠ類は、「下総南西部の在地系かわらけと推定」されている。そしてこの類のかわらけは、Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ類とともに、「17 世紀前葉まで続いている」（55 頁）という。特にⅠ-3 類は、「他の類型のものに比べ綺麗で」（49 頁）、最古の製品が「15 世紀後葉（第 3 四半期後半～第 4 四半期）～ 16 世紀初頭に位置付けられる」（48 頁）という。

以上の見解は、これまで長瀬分類Ａ－ 6 類（永越分類Ⅰ-3 類）が 16 世紀第 3 四半期の所産と考えられていたことに対して新たな見解である。

また、Ⅳ類に分類したカワラケは、いわゆる「渦巻きカワラケ」である。永越氏はこのカワラケとⅨ類とした手づくね成形のカワラケを、「国レベルの権力主体が用いたかわらけとも言える」（50 頁）とし、ここでは扇谷上杉氏や後北条氏との関係を意識している。また後北条氏が葛西城地域において支配を確立する時期にⅤ類が出現することも指摘している。しかし葛西城で主体的に出土するカワラケの画期と大名権力との関係については、次のようにも述べている。

「15 世紀第 4 四半期頃に器形変化があり、16 世紀中葉以降に新たな器形が加わり、この時期の器種構成が 17

世紀前半期まで存続する、ということが言える。この変遷で特徴として挙げられるのが 16 世紀前葉に上杉氏から後北条氏へと変わり、16 世紀末には徳川氏の支配するところとなるが、この支配者の代わる時期に、かわらけの器形に大きな変化が認められないことである。Ⅴ類のように 16 世紀中葉以降出現するものもあるが、総じては 16 世紀代から 17 世紀前半にかけては各類型の構成に大きな変化はなかった。Ⅰ類のような下総南西部のかわらけは、近世初頭まで一貫して製作、使用が続いており、時の支配権力が前代のかわらけを否定しなかったことによるものであろう。」(56 頁)

ということで、権力とカワラケの関係を否定している。つまり、「支配開始の時期とかわらけの変遷が合わない」＝「権力とかわらけとの関係はない」、という主張である。これは先述したⅣ類とⅨ類の評価と矛盾するようにもみえるが、おそらくこの時対象としたカワラケは、Ⅳ類とⅨ類を除いたもので、葛西城及びその周辺の「在地系カワラケ」に限ったことであろう。よってカワラケ全体ではなく「在地系カワラケ」は権力との関係がない、という主張であろう。

さらに、「江戸でも 1630 ～ 1640 年代頃までは、①厚手で、②多器形、皿型主体・左右回転（右回転が多い）の糸切りが見られる点で、近郊部と似た様相であったことが言える。葛西地域では、18 世紀代には江戸と同じタイプの左回転で薄手のかわらけとなり、こうしたかわらけへの変化は、17 世紀後半期に生じたことが推定される（永越 2002)。そうすると、17 世紀前葉のかわらけは、江戸及び郊外地域の左回転薄手という江戸タイプへの変遷は同時期と考えられる」(60 頁）という主張は、「17 世紀後半に生じた」変化が江戸でのカワラケの変遷と連動しているということで、この主張は、後述する北條ゆうこ氏による小田原の状況、秋本太郎氏による上州あるいは利根川中流域の状況とほぼ共通する。

ただ「Ⅰ類のような下総南西部のかわらけは、近世初頭まで一貫して製作、使用が続いており」という状況に対しての評価については、別の評価が宇留野主税氏から提示されている。すなわち宇留野氏の発表「常総地域のかわらけ」のうち、葛西城や近世の江戸地域に関する部分に絞れば、長瀬分類を用いる宇留野氏は、坏形のA類・B類が古河公方関連のカワラケと位置付けており、そしてこれらのカワラケが明暦 3 年（1657）の青戸御殿廃絶時まで使われている事実から、徳川政権と古河公方家（後の喜連川家）の関係、すなわち徳川政権が「関東に広がっていた古河公方関連の格式や儀礼は徳川政権がにわかに排除・改変するより、小田原北条氏と同様、関東支配のために権威を維持・利用するため存続させていた可能性が考えられよう」(144 頁）としている。

ここにおいて葛西城の「在地系カワラケ」に権力との関係を認めない永越氏と、徳川政権や古河公方との関係を認める宇留野氏との見解の相違があった。また「山内上杉のカワラケ」、「扇谷上杉のカワラケ」、「古河公方のカワラケ」を提唱する田中信氏によれば、「古河公方のカワラケ」とは、「体部が直線的に開き底径に較べ器高の高い逆三角形型の在来系R種を祖形とするものである。この土器の特徴は、白色胎土、体部のロクロ目の強調、底部の板状圧痕。時代が下るに従い底径と見込みをさらに小さくする傾向がある」(104 頁）という。そうするとやや属性の異なる長瀬分類A・B類（ほぼ永越分類Ⅰ・Ⅱ類）は、古河公方関連のカワラケとは異なるものということになってしまう。つまり田中氏の分類だと葛西城に古河公方関連のカワラケはなくなってしまう。

実は、筆者も葛西城のカワラケのうち長瀬分類A-6 類（永越分類Ⅰ-3 類）を「古河公方のカワラケ」と考え

たことがある。これは①成形・整形が非常に精緻に仕上がっていること、②製品の規格性が極めて高いこと、③出現期間が古河公方足利義氏在城期間（天文 19〔1550〕年か同 20 年～永禄元〔1558〕年）に重なること、の 3 点の理由による。このうち①②はこの類のカワラケが精製品であることを示し、近世の江戸の上製カワラケが極めて精製であること、また今回の大会で能芝勉氏が発表した「天盃」という上製の土師器皿の存在から、カワラケの質による階層差がうかがえ、こうした点からも「古河公方のカワラケ」を考えたわけであるが、永越氏の発表によれば永越分類Ⅰ-3 類は義氏在城期よりも古くから葛西城にあるということなので、その点と田中氏による分類を克服しない限り永越分類Ⅰ-3 類を「古河公方のカワラケ」と結びつけることは保留とする。しかしこのことは「古河公方のカワラケ」を筆者が否定するものではない。

以上のような見解の相違は、歴史的背景の認識の違い、分類とその位置付けの違いによると思われる。しかしこうした互いの溝は、十分議論が深まれば埋まるものと考える。

(2) 編年の問題と時期評価

北條ゆう子氏の発表では、中世から近世へのカワラケ変遷の画期は、「1630 年代から 40 年代にかけての時期に中世から近世に至る画期が設定される」（86 頁）と述べている。こうした事実を明らかにした過程で北條氏は編年の問題に一石を投げかけた。すなわち「小田原編年ではこの大久保氏の支配期をⅢa 期として位置付け、志野の出現をメルクマールと捉えて一括遺物の時期比定をおこなってきた」（85 頁）とこれまでの小田原編年を述べ、続けてこのままでは後北条政権の終焉と大久保氏の入封の時期、つまり天正 18（1590）年と志野の出現期（1600 年頃）の間に空白期間が生じると述べている。そこで北條氏は、「政治史の枠組みから一旦離れて、再度、出土遺構およびその共伴遺物の検討をおこなうことが急務である」と主張する。

筆者は、政治史の枠組みから一旦離れる事がいいかどうかわからないが、確かに考古学的な検討が必要だと思う。これはなにも小田原だけの問題だけでなく、筆者がかねて中世考古学研究者の話を聞くときに感じる問題である。つまり戦国期に限って言えば、中世考古学研究者の間では大窯編年が非常に重要なポイントとなっている。この物指しに関東はもとより多くの地域で寄りかかった研究が進んでいる。

こうした方法は、自立的な編年をほぼ確立している江戸の状況からすると、失礼ながらいささか奇異な感がある。江戸では文献に残された火災・地震・大風の被害、屋敷替え、普請、作事などを一括遺物の組成と対比しながら編年を構築している。これができるのも条件の整った江戸だからだ、と言われそうだが、なぜそれぞれの土地の状況を捉えた自立的な編年ができないのかと考えてしまう。それぞれの歴史的な状況を吟味した上で考古資料と対比してできないものであろうか。

次にもう一つ北条氏からの問題として「1610 年代までは総体的には中世といっていい」（85 頁）という主張がある。こうした 17 世紀前半代における中世から近世への画期は、先述したように小田原はもとより、江戸でも葛西城地域でも上州乃至は古利根川流域でも共通する。ということは、近世社会は家康の関東入封直後から眼に見えてくるのではなく、入封後十数年乃至数十年経てから見えてくるものなのである。

例えば江戸のカワラケをみても、入封から 1610 年頃までは入封以前からの様相と変わりがない。つまり中世的様相である。筆者はこれを「0 段階」とした（22・23 頁の第 1・2 表）。そして 1610 年代から梶原分類Ⅰ群・Ⅱa・b 群といった様々なカワラケが出現するようになる。これを「1 段階」とした。この間の徳川家

康及び江戸の状況をみると、家康が天正 18 年 8 月から元和元（1615）年までの 25 年 5 ヵ月の間に江戸に滞在していたのは、約 60 ヶ月である（鈴木 1976）。まして家臣を関東の各地に配置し、在地支配の基盤を作っていくが、その支配形態は、中世の在地領主に近いあり方である。近世といえば兵農分離、武士の城下町集住ということを念頭に置けば、こうして江戸周辺に配置された武士が江戸へ集住し始めるのは寛永年間からで、1630 年代以降ということになる。

こうしたことは考古学的にも明らかにされており、例えば農村部では東京都清瀬市の下宿内山遺跡で「陣屋」と称される土地から検出された大型の掘立柱建物は、三時期の変遷がたどれ、その期間はほぼ 17 世紀代前後に収まる（内田 1986、梶原 2001）。また東京都三鷹市の島屋敷遺跡でも「島屋敷」あるいは「柴田陣屋」と称される土地から同様な掘立柱建物が検出されている（西股総夫 1997、梶原 2001）。これらは下宿内山遺跡が太田甚九郎・太田次郎右衛門・石川播磨守という旗本が、島屋敷遺跡では元和元年以降柴田勝家の子、柴田三左衛門勝重が幕府の旗本として知行していた。勝重は寛永 9（1632）年没するが、柴田氏の知行は元禄 11（1698）年まで続く。なお勝重の墓碑は、島屋敷遺跡から南 500 mに位置する春清寺に伝存している。

双方とも建物は 17 世紀中葉～後半まで残存していたらしいが、当主は寛永年間以降江戸へ移住している。一方江戸でもこうした旗本を受け入れるべく幾多の普請、例えば日比谷入り江を埋め立てて宅地造成を寛永期までに行った愛宕下遺跡の例（東京都埋蔵文化財センター 2009・2011）などがある。

1610 年代と言えばもう一つ大きな節目として、慶長 9（1604）年に発令され、慶長 10 年から 11 年にかけて行われた江戸城の公儀普請がある。多くの大名が携わったこの普請では多くの労働力がもたらされ、そこに突如として巨大な市場が形成された。巨大な市場ができれば物流も増大し、以後数度の公儀普請によって江戸は近世都市として形を整えていく。そして寛永 13（1636）年の公儀普請（外堀普請）によって江戸の総構えは完成する。

このように江戸という都市をみても総構えが完成するのは家康入封後 46 年後であるし、家康征夷大将軍就任からでも 33 年の年月を要している。支配者が変わったとしてもその支配が完成するのは、その土地の事情で違うが十数年から数十年かかると言うのはそうしたことからである。

したがって北條氏が指摘した「1610 年代までは総体的には中世」という主張は、物質文化からみればあり得る。ただし各地域における年代は、地域の事情によって若干異なってもおかしくない。

(3) ロクロの回転方向について

田中信氏の発表「北武蔵のカワラケ」では、ロクロの回転方向による「上下差」（109 頁）を問題提起した。

筆者は、田中氏の主張である「山内上杉氏のかわらけ」、「扇谷上杉氏のかわらけ」、「後北条氏のかわらけ」、「古河公方のかわらけ」という大名系のカワラケ論を支持している。これらは永越氏の述べた「国レベルの権力主体が用いたかわらけ」（50 頁）を指すものと思われ、国人領主クラスではなく、一国規模の領地を有する大名は、少なくともカワラケの生産関係を手中に収めていると思う。そしてこれはカワラケだけでなく領国内における様々な物資に共通するものとも思う。筆者はその点が戦国大名の特徴で、守護大名との大きな違いであろうと考えている。そうでなければ戦国大名の経済基盤を理解できない。

以上のような理由で田中氏の論を支持しているわけだが、ロクロの回転方向については、もう少し考えなけ

ればならないと思っている。つまり鈴木とよ江・鈴木正貴氏の発表「西尾城を中心とする西三河の土師器皿」にもあるように、西尾城での土師器皿変遷は、「戦国織豊 1 期・2 期に比定できる皿類については法量に関わらずロクロ左回転のものばかりであった。（中略）そして、3 期・4 期に比定された土師器皿についてはロクロ右回転であった」といった事実から、1 期・2 期が吉良氏の領主期、3 期・4 期が吉良氏から今川氏を経て徳川氏へと領主が移る時期という歴史的事実を重ね合わせて、足利将軍家の一門である吉良氏が上位の左回転、後に三河を治める後進の徳川氏が下位の右回転という上下差と流れを想定した。また先述したように、葛西城における左回転の永越分類Ⅰ-3 類を古河公方義氏のカワラケと睨んでいた筆者は、回転方向の上下差は存在するとみていた。

しかし田中氏によると、関東においては山内上杉氏が左回転、古河公方と扇谷上杉氏が右回転という状況であるという（108 頁）。ということは、回転方向の上下差は、大名間の上下差ではないと言うことなのであろうか。大名が用いる自国のカワラケの中だけで認められる上下差なのであろうか。

こうしたことから、回転方向に上下差があるとしたら何を示すための上下差なのかを、もう少し考えてみる必要があろう。

(4) 秋本太郎氏によるかわらけD類について

秋本太郎氏は「上野の 16 世紀から 17 世紀前半のかわらけ」で、近世の江戸にかかわりの深いカワラケを紹介した。それが秋本分類D類である。

今回、秋本氏には西上野のカワラケのうち、田中氏が述べるところの「山内上杉氏のかわらけ」を紹介していただき、カワラケと大名権力との問題を論争していただきたかった。秋本氏はカワラケと大名権力との関係はないとする立場の研究者である。しかし今回の発表で秋本氏は、「山内上杉氏のかわらけ」について触れず、時期の下ったカワラケに絞った話を聞くこととなった。ところがここでの発表は、予想外の成果を生んだ。

秋本分類D類は、「C類と比較して、器高が低い。内湾し厚手」（123 頁）であるという。初現は、忍城跡第 1 次調査橋第 22 層で、「小田原の手づくねかわらけや初山の稜皿と共伴」（124 頁）しているという。すなわち大窯第 3 段階後半である。以後D類は分布域を広げ、17 世紀に入ると西上野まで広がる。

このD類の特徴は、前号の会報で一部村山卓氏が触れているように、①胎土に角閃石を有すること、②口縁端部が膨らむものが多いこと、③白色～灰色の色調が多いこと、④一見ゴマ塩をイメージする器壁、といった特徴をもつ。江戸地域で出土したこうしたカワラケを秋本氏に実見していただいたところ、「まさに（西上野）そのもの」という見解を得た。

大会当日実見できたものは、東大本郷構内出土のものと、千代田区丸の内一丁目出土のものであるが、ほかにも港区愛宕下遺跡でも多数出土している。また江戸の西郊に位置する中野区御嶽遺跡でも一定量出土している（永越氏の発表要旨 76 頁の第 13 図には、残念ながら掲載されていない）。したがってこのD類が江戸でみられる 1610 年代から 1630 年代前後までは、相当量のD類が江戸に搬入されていたのである。永越氏が述べているように、「江戸が都市として発展していく過程で、（中略）中世後期以来の在地の土器生産体制で賄うことは難しかったのではないか」（60 頁）と言う見解はその通りだと思う。よってこの期間においては、江戸にD類以外にも各地からカワラケが搬入されていたものと考える。以上、筆者の分類Ⅱa 群の出自について、大

きなヒントが得られた。

(5) 京都の土師器皿の量と階層性

今回、能芝勉氏によって京都の土師器皿事情の一端が紹介された。特記しておきたいことは、土師器皿の量と京都の土師器皿の中にも階層性があるということである。

京都では土師器皿が廃棄されている土坑を半截すると、断面は真っ白になると言う。つまり土師器皿（京都の場合は白色の土師器皿が多い）が土よりも多く廃棄されているためで、能芝氏によれば万単位の破片数が出土し（165 頁)、トン単位の量になるところも珍しくないという（能芝氏からのご教示)。こうした現象は、いくら最盛期の江戸でもありえないことである。

ここでは京都と江戸のカワラケの量の違いが認識できたことと同時に、畿内と東国の文化の違いを考えざるを得ない。すなわち古代から連綿と続く土器を日常的に食器として使う畿内地域と、古代末期から土器を食器として使わなくなる東国、と言う文化の違いである。この違いを認識しなければ、カワラケの評価の問題には進めないだろう。つまり東国は、日常的に土器を使うことがない社会に、15 世紀後半以降、武家儀礼の普及に伴ってカワラケを大量に使う習慣が普及していくと思われる。しかもそれは上級武士の儀礼という限定的な使われ方から始まっていると思う。燈明皿として一般に普及するのは、まだ先のことである。

次に階層性の問題だが、能芝氏が紹介してくれた資料に「天盃」がある。「天盃」とは天皇から下賜された土師器皿で、京都三千院に伝世するものに「天盃」と箱に墨書されてあるものが紹介されている（163 頁)。またこの箱には「享和三年～文化五年（1804 ～ 1808）の間に天皇から、毎年一枚づつ拝領した旨が伴」っている。163 頁の実測図をみただけでは、172 頁図 4 に掲載されている土師器皿と区別がつかないが、能芝氏によれば「際立って調整が丁寧な一群」（163 頁）であるという。このように実測図にすると同形だが、質感に差が生じているカワラケがある。この差は上質なものに「天盃」と記されているところからみると、上質＝天皇、それ以外の製品＝市中流通品という上下差を表しているものと考える。

こう考えると京都以外のカワラケでも、このような上下差がみられるのではないかと思う。分類を行なう時など、カワラケは実見して形態観察、成形技法、色のほかに質感までをも確かめて行なうべきであろうし、こうした観察から使用者の上下差がみえてくる可能性がある。

(6) 京都・南伊勢の土師器皿と江戸の手づくねカワラケ

さて今大会において筆者が基調報告をした際に、江戸の「白色系カワラケはどこから来たか」という問題を提示しておいた（12 頁)。そしてこの問題は大きな成果があった。

小林謙一氏が江戸のカワラケの分類と編年を提示したのが 1990 年代前半である（小林 1992、1994 ａ・ｂ)。この時期、まとまった資料としての白色系カワラケ、特に手づくねのカワラケは東大本郷構内の資料くらいであった。東大本郷構内の資料は、今大会でも会場の参加者に見ていただいたが、能芝氏によると京都系のカワラケであるという。京都系のカワラケとは、京都産のカワラケではなく、京都のカワラケを模倣して作ったカワラケである。どこで生産されたものかは、かつて増山仁氏が江戸遺跡研究会第 13 回大会「江戸と国元」において、「国元（金沢）から直接運ばれたとしても何ら違和感のないものである」と述べている（増山 2000)。

こうしたことからそれ以降、白色で手づくねのカワラケは、京都系という見解が江戸地域に広まった。ところが 1990 年代後半から江戸城周辺の千代田区から調査が増え、新たな資料が増加すると京都系とはいえない一群の白色で手づくねのカワラケが検出されるようになった。

平たい底部から内湾しながら立ち上がる極めて薄く硬い器壁を有するこうしたカワラケについて、最初に見通しを立てたのが仲光克顕氏であった。筆者が仲光氏から問題のカワラケについて、伊勢産ではないかと聞いたのが 2009 年であったと記憶している。

このことが頭から離れず、佐藤公保氏のご尽力による 2011 年 6 月に開催された東海地域のカワラケ検討会に三重県から伊藤裕偉氏を招いてもらい、江戸の手づくねカワラケをみていただいた。また今大会でも同様にみていただいた。こうして能芝氏と伊藤氏にみていただいた江戸の手づくねカワラケは、東大本郷構内のものが、産地は別としても京都系カワラケ、平たい底部から内湾しながら立ち上がる極めて薄く硬い器壁を有するこうしたカワラケは南伊勢のカワラケということで、ほぼ良とされた。ただし後者については、東三河にも同様のカワラケがあるとのご教示を鈴木正貴氏から承っている。この点は今後も検討を要するが、ともかくこれまでのような手づくね成形であれば「京都」と記される報告書はなくなるであろう。このことが確認できただけでも大きな成果である。

(7) 梶原Ⅱｂ群（小林分類C類）はどこから来たか

もう一つ筆者が基調報告で提示した問題に、上記の問題がある（12 頁）。筆者が提示した分類においてⅡ群とした赤色系のカワラケのうち、Ⅱａ群としたものが中世から引き続いて江戸周辺地域でみられるカワラケである。この群はさらに細分が可能で、先述したように永越分類Ⅰ類や秋本分類D類（注 1）も含まれている。

こうしたカワラケとは形状でも質感でも異なる薄手で底径の大きなカワラケがⅡｂ群である。つまりⅡａ群とは別系統である。1610 年代から出現し、17 世紀第Ⅲ四半期頃まで存続する。ロクロの回転方向は左右両方あるが、古い時期のものには右回転が多く、新しいものには左回転が多い。おそらく 1640 年代から出現するⅡｃ群と同系統のカワラケであろう（注 2)。

Ⅱａ群によって占められていた江戸に、突如として現れるⅡｂ群は、元々が在地で発生したものではないだろう。となると祖形はどこにあるのか。これを問題とした。そこで関東各地を見渡すと、16 世紀後半頃にⅡｂ群と共通する属性を有するカワラケが用いられている地域として上州が候補に挙がった。比較的薄手で底径の大きな皿形を呈するカワラケは、上州にしか見られなかったからである。

一方、筆者の基調報告でも述べたとおり、家康は天正 10（1582）年、岡崎にて松井弥右衛門を御土器大工として召抱えている。天正 18 年の関東入封の際には随行して江戸へ入り、下谷長者町に拝領屋敷と禄を与えられている（10 頁)。ということは義務としてカワラケを生産し、徳川家に納めなくてはならない。要するに天正 10 年以降は、徳川氏のカワラケが成立していたと考えられる。しかしそのカワラケがどのような形態だったのかは、未だ判断がつかない。

この松井弥右衛門が作製したカワラケがあるとすれば、その形態は出身地である三河のカワラケが母体であった可能性が高い。その意味で今大会では、三河から鈴木とよ江・正貴両氏に発表をお願いし、また尾張からも佐藤公保氏に紙上で発表をいただくとともに、江戸のカワラケを実見していただいた。

結果としては、上州も三河もそれぞれ江戸とのカワラケに共通点はあるものの、それが祖形だとは断定できなかった。三地域のカワラケの属性比較を、さらに極めることはもちろんだが、まだまだ検討されていない状況証拠を吟味することも必要だと考えた。例えば、西上野において秋本分類A類が 1600 年代を持って消滅する一方で、共通する属性を有する江戸のⅡｂ群が 1610 年代から出現するという事実の意味、あるいは松井弥右衛門のカワラケは、Ⅱｂ群以外のカワラケ、例えば江戸城北の丸でみられるロクロ成形の白色カワラケなどの可能性などである。

(8) 京坂の土師器皿市場と江戸のカワラケの生産関係

今回の大会では、能芝氏によって京都の土師器皿の膨大な出土量が明らかにされた。これは京都に江戸とは比較にならないほどの生産量があることを示している。一方、赤松和佳氏・渡邉晴香氏による紙上発表「摂津地域における土師器皿」よって明らかにされたように、摂津地域では狭い地域ごとに土師器皿の様相が異なりヴァリエーションも多いが、どこを掘っても土師器皿が出土するという状況は両地域に共通する。

以上ことを東国及び近世の江戸と比較すると、戦国時代の東国では城館、武家地、有力寺社といった地点しかカワラケは出土しない。近世初期（1610 年代以前）でもほぼ同様で、上記の地点以外で出土したとしてもごく僅かである。

これには先述した元々の文化の違い、具体的には食生活習慣の違いが存在するとともに、もう一つ忘れてはならないことに市場経済規模の違いがある。すなわち中世都市鎌倉を除いて、元々カワラケの流通が少なかった東国に 15 世紀以降、室町幕府の式正が普及しカワラケの需要が増える。しかし在地にカワラケ市場が発達していないため生産者は少ない。そこで需要者である上級武士は、カワラケ職人を抱え込み、保護しカワラケを貢納させる。この上級武士が永越氏の述べる「国レベルの権力主体」であろう。

また在地の武士社会では、永越氏が「中世後期においては郡レベルで器形が異なっている」と指摘しているように群レベルの中に複数の中小需要層（主に武士）が存在し、需給バランスを保っている。この場合のカワラケ形態は、想像をたくましくすれば「国レベルの権力体」が有するカワラケの形態に影響を受けたカワラケになるものと思われる。

以上が戦国期の東国におけるカワラケの生産関係と推定するが、だとすると「国レベルの権力主体」が独自のカワラケをデザインした場合、それは比較的認識しやすい。つまりカワラケの形態もさることながら、市場に流通するものではないため、当主の在所か、室町幕府の年頭儀礼（注 3）で見られるような下賜されたカワラケが各家臣の在所で出土するなど、分布が偏在性を帯びるからである。ところがカワラケ市場が発達している場合には、権力と結びつきの強いカワラケがあったとしても市場に紛れて確認は困難であろう。言い方を替えれば、特に偏在性もなく出土する場合には市場が発達している可能性があり、それを前提として遺物をみていくこともできよう。

近世の江戸をみると 1610 年代からカワラケの出土が量も種類も多くなる。このことは永越氏が「江戸が都市として発展していく過程で、（中略）中世後期以来の在地の土器生産体制で賄うことは難しかったのではないか」ということから江戸以外の地域からの搬入品の存在を想定した。こうして 17 世紀前半までは搬入品に頼っていた江戸のカワラケ市場であったが、梶原分類Ⅱｃ群（小林分類Ｆ類）が出現する頃から江戸での生産

量は大幅に増大する。そして 17 世紀後葉には、江戸近郊産の梶原分類Ⅱｃ群が大部分となり、18 世紀には入ると江戸市中はもとより場末の地域でも武家地や町屋の別なく、いたるところからカワラケが出土するようになる。つまり出土の状況は京坂と同様になり、いたるところから出土するⅡｃ群をみても単なる市場流通品としかみられず、徳川権力と関係するカワラケとはみられない。このことはようやく江戸も 17 世紀後半以降、カワラケの巨大市場が確立したといえるのではないだろうか。

おわりに

長々と述べてきたが、以上は筆者の感想に近い話である。こうした問題点を今後は論証していく所存であるが、最後に方法的な面での筆者の考え方を述べてまとめに代えたい。

大会当日、筆者は数人の方から「権力との問題を議論する前に、カワラケの実態を深めた方がよいのではないか」というご意見を伺った。貴重なご意見で、無視できないご意見であると思う。しかしこれは江戸のカワラケ研究史を見た場合、現段階では当てはまらないと思う。

江戸のカワラケ研究は、先述したように小林謙一氏や、佐々木彰氏（佐々木 1990 a・b）によって 1990 年代前半から積極的に進められてきた。分類・変遷・細部の特徴などの成果は、今でも有効な成果である。筆者の論考は、こうした成果を土台に組み立てられている。つまり小林氏や佐々木氏によって示された成果に、その後 15 年から 20 年を経た新たな考古学データを付け加えるとともに、筆者の論題に即したように小林氏の分類を並べ替え、それに「大名とカワラケ」という視点を導入し、論を展開しただけである。要するにカワラケについての基礎的なデータは、1990 年代前半に出尽くしているといっても過言ではない。そのことは、1990 年代後半以降、小林氏や佐々木氏を越える研究がなかったことも、それを物語っていよう。

筆者は、こうした研究状況を一歩前進させようと思い、「大名権力とカワラケ」という視点を導入し、大名とカワラケの関係性、大名のカワラケ生産の実態、ひいては大名による生産関係の把握の過程や経済基盤構築のための一過程をみようとした。そこに武家儀礼の導入という事態が絡み、なかなか難しいのであるが、こうした問題を深めて行きたいと考え、今大会を企画したのである。

考古学の世界では、例えば田中氏の仮説（扇谷上杉のかわらけ論）や河合修氏の仮説（今川氏のカワラケ論）が提示された場合、すぐに「文献から離れ、遺物の実態を突き詰めた方がよい」とする意見が出る。もちろん傾聴に値する意見だと思うが、田中氏のように文献の成果と考古資料両方を見据えながら仮説を提示し研究を進めていく方法も大切なのではないだろうか。本号で大会参加記「第 25 回大会によせて」を寄稿していただいた長崎威之氏も、史料の取り扱いには十分に注意するようにと指摘しながら、そのように主張しているように思える。

そもそも発掘調査で出土する考古資料は、大部分が人間による生産物である。物が生産され、運搬され、消費され、そして廃棄されるというプロセスを経たものである。こうした生産品は、社会的分業が進んだ社会においては権力との関係が強まる。つまり、社会的分業が進むと生産から廃棄までのプロセスの中で、より多くの人の手を経る。人と人との接触が増えれば、そこに利害関係が生じる。利害関係が生じれば、調停機関が必要になる。その調停機関が永続性を計るために主従関係を必要とする場合、主従関係を維持する演出に必要な道具が用いられる。そこで調停機関＝権力がその生産品の生産関係を管理する。よって社会的分業が進んだ社

会においては、生産物は権力と無縁ではいられない、と思う。筆者は、こうした人間社会の一角にカワラケがあるという理解でカワラケをみている。ただ言葉の足りない筆者にとって次のような伊藤裕偉氏の提言は貴重である。最後にその提言を引用しこの稿を閉じたいと思う。

「たとえば、中世後期の土器分布と戦国大名との関係を指摘する研究がある。大名の影響領域（≒領国）に見られる土器分布に対し、そういった見解が提示されている場合が多いし、実際に筆者自身もそのように認識したものがある。大名拠点での土器生産が推察される場合があることを踏まえれば、両者に何らかの因果関係が存在するのは確かであろう。しかし、全ての戦国大名にそのような状況が確認できるとは即断できない。また、地域によって生産工人の形態も多様であろうから、それぞれの場所や大名ごとで違った関わり方が考えられる。さらに、拡縮が常である戦国大名「版図」と土器とがどう関わるのか、戦国大名の流通政策と土器との関係、中世後期以前の土器分布との違いなど、簡単に考えただけでも多くの課題がある。そして、そもそもこれが「流通」という概念で表現できる状況なのかどうかという根源的な問題も内包されている。

さらに、実はこれが最も危惧されていることであるが、一旦「大名と土器分布には関連がある」といった指摘がなされると、それが先に掲げた課題を解明しているかどうかにかかわらず、「大名と土器分布には関連がある」ということばのみが一人歩きすることがしばしば見られる。このような状況はけっこう多く観察できるのであり、何かそれがすでに証明済みのような雰囲気を作ってしまっている場面もある」（伊藤 2005）。

【注】

1. 秋本分類D類は、胎土が白色～灰色のものを多く含んでいる。しかし角閃石など差粒状の粒子がみられ、ゴマ塩状の胎土というイメージがある。したがって混入物の少ない京都や南伊勢のカワラケとは明らかに異なることから、白色系のカワラケからは除外している。
2. Ⅱc群の初現の年代は、17 世紀第Ⅱ四半期に遡る可能性をしておきながら、1660 年代としていた（8 頁）。しかし大会終了後、長佐古真也氏から 1640 年代には確実にあると言うご教示を受けた。よってここより 1640 年代初現とする。
3. 室町幕府の年頭儀礼については、当主に拝謁した家臣がカワラケと呉服を下賜され持ち帰る。二木謙一『中世武家の作法』を参照。

【参考文献】

浅香年木　1975「中世の技術と手工業者の組織」『岩波講座　日本歴史 6　中世 2』岩波書店

伊藤裕偉　2005「中世の流通に関する考古学的分析の現状と課題」『考古学と文献研究　中世の城館と集散地』高志書院

内田祐治　1986「第Ⅲ章　第 3 節　2.江戸時代以降」『東京都清瀬市　下宿内山遺跡』下宿内山遺跡調査会

永越信吾　2002「葛飾区域出土の近世かわらけ」『上千葉遺跡Ⅱ』葛飾区遺跡調査会

梶原　勝　2001「多摩地域における近世の掘立柱建物」『埋もれた中近世の住まい』同成社

小林謙一　1992「Ⅲ-3　皿形土器類」『シンポジウム　江戸陶磁器土器の諸問題Ⅰ　発表要旨』江戸出土土器陶磁器研究グループ

1994 a「江戸在地系土器生産の成立に関する予察－近世都市江戸における 17 世紀の土師質皿－」『考古学研究』第 41 巻第 2 号　考古学研究会

1994 b 「江戸在地系土器生産の展開に関する予察」『江戸在地系土器の研究Ⅱ』江戸在地系土器研究会
佐々木彰　1990　a 「江戸時代のカワラケの動態と推移」『東京大学本郷構内の調査　医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室
1990 b 「近世江戸のカワラケと炮烙について」『江戸在地系土器勉強会通信』16
佐藤博信　2010「古河公方足利義氏と東国」『葛西城と古河公方足利義氏』雄山閣
鈴木理生　1976『江戸と城下町』新人物往来社
東京都埋蔵文化財センター　2009『港区　愛宕下遺跡Ⅰ』
東京都埋蔵文化財センター　2011『港区　愛宕下遺跡Ⅱ』
長瀬　衛　1974「カワラケ・灯明皿」『青戸・葛西城址調査報告　Ⅱ』葛西城址調査会
永原慶二　1975「中世都市と市場構造」『日本史を学ぶ２　中世』有斐閣
西股総夫　1997「掘立柱建物址」『島屋敷遺跡Ⅰ　第Ⅱ分冊　歴史時代編 1』三鷹市教育委員会・三鷹市遺跡調査会
二木謙一　1999『中世武家の作法』吉川弘文館
藤沢良祐　2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第 10 輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
増山　仁　2000「8. 金沢城下町の様相」『江戸遺跡研究会第 13 回大会〔発表要旨〕　江戸と国元』江戸遺跡研究会
吉岡康暢　1994「食の文化」『岩波講座　日本通史　第８巻　中世 2』岩波書店

お詫び ： 斉藤進氏の略報「溜池遺跡の調査」は、絵図の使用の関係で図3、図6は非掲載とさせていただきました。『千代田区 溜池遺跡　衆議院新議員会館整備事業に伴う調査 埋蔵文化財センター調査報告 第258集』をご参照ください。